

□海外文献紹介□

Crohn 病における肛門および大腸直腸周囲の瘻孔や膿瘍の内視鏡的超音波検査

Endosonography of peri-anal and pericorectal fistula and/or abscess in Crohn's disease: *TL TIO, et al* (Gastrointest Endosc 36: 331-336, 1990)

経直腸的内視鏡超音波検査(ES)が臨床的に瘻孔や膿瘍の疑われる36人のCrohn病患者に実施された。

17人は外科的治療が、19人は内科的治療が実施された。ES所見で肛門直腸腔に隣接する低エコーもしくは無エコーの管腔様構造(瘻孔)は、前者で15人に後者で17人、計

32人に見つかった。また瘻孔に隣接する、あるいは瘻孔と交通した無エコーの腔(膿瘍腔)は前者で14人に、後者で15人に見つかった。膿瘍を認めない残りの患者では瘻孔のみが認められた。瘻孔造影は前者では5人、後者では4人に実施された。

外科的治療を行った17人全員でESで認められた瘻孔や膿瘍の拡がりや部位が確認された。内科的治療群では初回ES実施後4週で経過観察のESが実施され、19例中13例で瘻孔の大きさや長さの減少が認められ、3例では瘻孔や膿瘍が消失し、残り3例は変化がなかった。また、ESの合併症は認められなかった。

著者らはESは肛門直腸周囲の病変の拡がり、部位、形を正確に評価

できるうえ、ESは細菌の播種の危険性が少ないこと、患者の不快感も少ないことから、肛門周囲に病変を有する患者においては、瘻孔造影や注腸造影に比し、よりよい診断手技であり、治療方針決定のための優れた診断法であると結論している。

【訳者コメント】 著者らも述べているようにCrohn病の肛門病変の正確な診断には、病変の性状、拡がり、周囲臓器との関係が同時に診断でき、しかも細菌の播種の危険性の少ない本法が最も適していると思われる。

(愛知県がんセンター消化器内科

中村常哉 抄)